

ひめまつ

理事長須賀友正先生御夫妻追悼特集

37



宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

翠

ひめまつ 目次 第三十七号

巻頭言 学園一丸となって発展を 表紙絵……島田武幸 題字……石川木魚 写真……写真部・伊東礼一
理事長須賀友正先生御夫妻追悼特集 四月には附属中学校もスタート 校長 須賀 淳 2

哀悼―追悼特集にあたって― 須賀友正先生御夫妻を偲ぶ(読売・毎日・下野各新聞から) 5

◇須賀友正先生学園葬弔辞 御意志の継承を誓う 葬儀委員長 高野 耕 立派な後継者に期待 栃木県私学連合会長 上野 秀文
私学振興の功績を称う 栃木県知事 船田 謙 米寿・白寿までと願いに 学生・生徒代表 鈴木 裕子
偉大な教育者失う 宇都宮市長 増山 道保 忘れられぬ先生の愛情 同窓会長 篠崎キミエ

◇遺族代表挨拶 末長くご指導ご鞭撻を 須賀 淳 15
△校内放送 清廉なお人柄を偲ぶ 斎藤太嘉男 15
私の中の理事長先生 戸室 文子 17

◇須賀ハナ子先生葬儀弔辞 理想的な良妻賢母 宇都宮市長 増山 道保 私達をお守りください 教頭 斎藤太嘉男
学園支えた内助の功 同窓会長 篠崎キミエ 手塚 武 23
姉を悼む―悲しみは潮のごとくに―

忘れられぬ焼跡のお二人……ハナ子先生の思い出の数々 園部シヅエ 25

特別寄稿 須賀友正先生を偲んで 栃木県文化功労者 手塚 武 27
須賀友正・ハナ子先生に捧ぐ 本学 園理事 高野 耕 28
常に積極的に(生徒会長に就任して) 小池 まゆみ 29
責任と自由(生徒会一年の活動を顧みて) 加藤 久美 30

△声 新校舎落成・自然をみつめて 落成間近に……二年 若井田あゆみ・田中真由美・小林美千代
新教室の喜び……二年 山崎雅代・福田昌代・奈良百合子
自然をみつめて……二年 岩淵和子・増淵雅子・菊地由美子・小川真由美
三年 渋谷暢子

心に強く響くもの(校内読書感想文コンクール入賞作品) 第三十三回全国植樹祭に参加して 三年 加藤 久美 38
車輪の下……情野 朋子
恩讐の彼方に……加藤 悦子
ビルマの堅琴……高橋里恵子
窓ぎわのトットちゃん……磯野由紀子
福郷……菊地 由美
友情……岡田真由美

アンネの日記 田崎 京子
ビルマの堅琴……伊東 愛子
わたしは負けない……高橋 美江
友情……下田由美子
さと子の日記 田代 知子

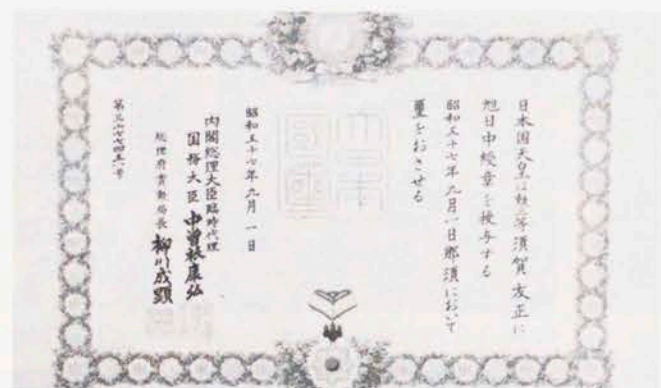
詩 塚田めぐみ・塩田佐代子・情野朋子・山上友子・高松純子・大竹利江・福田礼子・大森寿子・野中道子 52
遠藤由美子・大森理江・湯沢光江・上岡治美・田中由美子・堀井泉・他

招待席 先生方の随筆コーナー 旅のひろいもの……大谷 武 華道とわたし……青山 典子 歴史は必然か……田南 仁 67

須賀友正先生夫妻ご逝去



叙勲の日の先生ご夫妻



褒章の記 勲記



勲三等旭日中綬章

昭和五十七年九月一日
 内閣府令第...号
 須賀友正君に
 勲三等旭日中綬章を授けしむるに
 依りし事
 昭和五十七年九月一日
 内閣府令第...号
 須賀友正君に
 勲三等旭日中綬章を授けしむるに
 依りし事

勲記

内閣

昭和五十七年九月一日
 勲三等旭日中綬章を授けしむるに
 依りし事

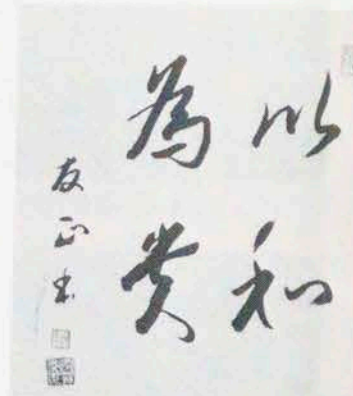
勲記

一期一会.....	神長 裕子	わが人生の軌跡.....	藤橋 渡	座禪を通して.....	安納 富士子
寄宿生の歌後日談.....	寺内 恒夫	四国の旅.....	伊沢 雪夫		
栃木県高校手芸フェスティバルに参加して.....					手芸部
国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール作品.....					今村容子
第一回産業教育振興会作文応募作品.....					鈴木靖子
すばらしいお礼状六通.....					北谷 司
関西・四国・大洗・日光の旅.....	情野朋子・今井江以子・須田香美・俣田和美・橋口友乃・君島昭子				85
我がホームルームのプロフィール(二年・二年・一年).....					90
青の広場で語ろう.....	川俣かなり・星啓子・田代知子・桑野みどり・斎藤さゆり・石槻孝一・星直美・山口博・青柳宣子・鷹野徳子				116
委員会・クラブ活動この一年美化・風紀・保健・体操・庭球・他.....					126
◎学園ニュース・トピックス.....	学校祭・読書感想文入選者・研修旅行・他				137
校友会の奉仕活動.....	(旭・陽南・雀宮・陽西・他)				140
家政科検定試験合格の状況.....					154
本年度の就職状況一覧.....					155
昭和五十七年度生徒会役員.....					158
昭和五十七年度行事及び予定.....					159
		職員住所録.....			160
		編集後記・奥付.....			164

須賀友正先生ご夫妻を偲ぶ



叙勲祝賀会の折、校長先生と一緒に



墨痕もあ やかな色紙



生徒達の募金活動にもご協力



球技大会のあと賞品を渡される先生



灘尾文部大臣 来校されたとき 校長室にて

学園葬

—哀しみのうちにも盛大に—



葬儀委員長高野先生の弔辞



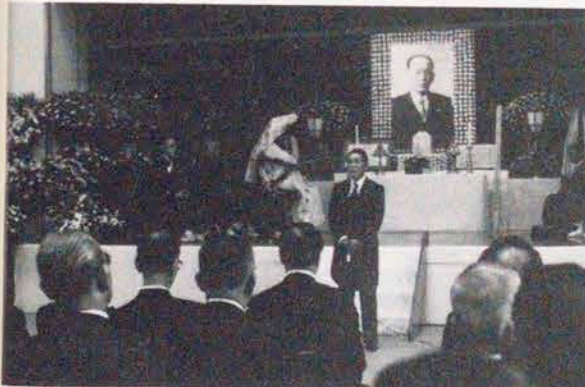
列をなす会葬者



最后のお別れ…安らかに



花いっぱいの祭壇



哀しみをこらえ挨拶される校長先生



各界よりの会葬の方々にいっぱい体育館



八幡山の墓所に永眠される



ご自宅での密葬



ガンバリマス！……生徒会新役員の面々



多くの新生を迎えて…対面式…お互にヨロシク



校内合唱コンクール…美声はどのクラス



校内球技大会…優勝するぞ！



今年も盛大な学校祭



どの会場も人、人、人…

大食堂



本館建築時の鍬入れ式



短大校舎の建築現場にて



仲むつまじいご夫妻…昭和29年職員旅行



お孫さんの成人祝の日に



日本スポーツ賞
トロフィーを
手にご満悦の
先生



礼法の授業をされる華子先生



お二人でこんなひとときも

ある日・あるとき

千二百米
日本道院公園

宇都宮短期大学附属高等学校

校歌

作詩 菅谷徳次郎
作曲 野原幸夫

かに たらののたー かねををは るかまに おまー ぎつ
 まか な びの み ち す じは ま ぎ き くろ あ ぜ れ と
 か た み に ちー か い て い そ し し み は げ む
 お ま し な え の にー わ こ そ げ に と め う と け れ
 あ わ れ と め う と た こ の ま ま な び や

校歌

一 二荒の高嶺を 遙かに仰ぎ
 学びの道筋 まさきくあれと
 かたみに誓いて いそしみ励む
 教えの庭こそ げに尊とけれ
 あわれ尊と この学びや

二 庭面に茂れる 姫松小松
 変らぬ操は 千代万代と
 かたみに祝いて いそしみ励む
 学びの庭こそ げに芽出度けれ
 あわれ芽出度 この学びや



新校舎落成…中学校もできました。



多数の受験生であふれました
(入試日)



合格発表…結果？

遠足…大洗海岸



カルタ会



キャンプ…松原湖畔

巻頭言

学園一丸となって発展を

四月には附属中学校もスタート

校長 須賀 淳



栃木県女子私学の草分けとして明治三十三年に創立された須賀学園は、今年の十一月で満八十三周年を迎えます。

建学の祖、須賀栄子先生は、女性の身でありながら明治、大正そして昭和の初めと学園創成期の幾多の困難を乗り越え、今日の基礎を築かれました。

創立当時の規模はまことに微々たるものでした。

とくに明治、大正時代の風潮は官尊民卑、男尊女卑の弊風が根強く、私学は軽視されていただけに、その苦勞はいかばかりであったかと思われまします。しかし、祖母の理想は高く、強固な意志によって学園の経営と理想の実現に一生を捧げました。

昭和九年、あとを継いだ第二代の校長（前理事長・学長）の須賀友正先生は、戦中、戦後のきびしい社会情勢のなかであって、さらに学園の規模の拡大と内容の充実に尽力され

ました。

昭和二十年七月には、第二次世界大戦の戦火、いわゆる宇都宮大空襲によって、すべての校舎と教材が一夜にして灰となりました。そのとき校長だった父が身を挺して学籍簿をはじめ学園の重要書類を守り抜いたことは今なお語りつがれているところです。

学ぶに教室なく、教えるに教材なく、文字どおり丸はだかからの学園の復興は実に苦難の連続でした。しかも戦後の教育制度が大きく改革された激動の時代でもあり、そのなかにあつての辛苦の数々は想像に難くありません。しかし、学園一丸となつての努力が実を結び、廃墟のなから立派に復興することができたのです。

昭和四十二年には県内外の期待をになつて、宇都宮短期大学音楽科を新設し、本校も宇都宮短大附属高校と校名を変更し、新しい発展を期しました。

私は翌四十三年に、父とともに学生、生徒の指導と学園の経営に当たるため、二十年間勤務した文部省を退任して学園にもどりましました。そして本校も普通、家政、商業、調理、音楽の五つの科をもつ総合高校として、『豊かな情操をつちかう明るい学園』として今日にいたり、昭和五十五年には創立満八十周年の記念式典を盛大に催すことができました。

しかし、昨年九月には、創立者のあとを受けて建学の理想の実現に五十年間教育一筋に尽力してきた父が死去し、そしてその二か月後の十一月には、父のよき協力者として学園

の経営に当たるとともに、みずからも教壇に立ってきた母も、父のあとを追うようにこの世を去りました。父のあとを継いで本学園の全責任を負うこととなった私は、今さらながらその責務の重大なことを痛感しております。

私は、人間の仕事のうちでもっとも尊く、またむずかしいものは教育であると信じています。それは対象が十人十色、それぞれ個性を持った人間であるからです。教育はその個性をいかしながら、人それぞれに伸ばしてゆかなければなりません。私は、嵩高な理想と信念によって創設された本学園の建学の精神に基づき、時々刻々と移り変わる時代のすう勢を見きわめながら本学園の教育に日々と組んでおります。

この四月には、本県では初めての全く新しい構想の附属中学校を併設して、「充実した学習と豊かな人間形成」を期すことになりました。中学・高校の一貫教育を通じて、各教科における高度の目標を達成し、「知・徳・体」の調和のとれた人間形成を進めようとするものです。すでに四十名の優秀な入学者も決定しております。これによって、須賀学園は、中学、高校、短大と文字通りの一大総合学園となります。

しかし、私はこの偉業が一朝一夕になしえたものではなく、創立者をはじめ多くの方々の努力の賜であることに心をいたし、卒業生、在校生、教職員の皆さんの協力をえて、今後ますます学園の発展に邁進する覚悟でおります。

哀悼

理事長須賀友正先生御夫妻 追悼特集にあたって

昭和九年以来、須賀学園理事長、校長として、また宇都宮短期大学の学長として、本学園の発展に尽力してこられた須賀友正先生には、昨年七月病を得られ、九月一日逝去されました。享年八十歳でした。九月五日には本学園において、学園葬がしめやかにしかも荘厳にとり行われました。

また、かねて病氣療養中であられた御夫人の須賀ハナ子先生には、五十年間、御夫君とともに学園の教育に当ってこられました。その御夫君の後を追うように、十一月二日御逝去、七十六歳でした。十一月五日、市内成高寺において葬儀が営まれました。

このあいつぐ不幸に、本学園関係者一同、深い悲愁と愛惜の情に沈んだのでありますが、朝野多数の来賓の御焼香に慰められ、両先生の偉大さを替える弔辞のお言葉に力づけられ、気をとりにおして、御遺訓に添うべく学園生活に立ち向かったのであります。

その当時新聞に報道された記事や、各方面からいただいた弔辞、関係者の追憶、哀悼の文などを集録して、前理事長先生御夫妻を偲び、その御冥福を祈りたいと思えます。

県教育界の父「すかさん」

教育の父、すかさん、と多くの県民から親しまれてきた須賀学園理事長で宇都宮短期大学長の須賀友正さんが、一日夕、急性肺炎のため八十年の生涯を閉じたが、教育関係者の間から惜しむ声が強く出ている。「一人は一校を代表する」の名言を残すなど県内私学振興に貢献し、また治安や文化にも大きな業績を残した。

須賀さんは、明治三十四年、宇短大の前身である須賀学園創立者で初代校長の故須賀栄子女士のオイとして生まれ、大正十二年、東京工大機械科を卒業と同時に、現在の県立宇都宮工業高校教諭として同校の創設に参画。同校校歌を作詞する一方、現在、県内公私立の多くの校訓と生活目標である「一人は一校を代表する」の名校訓を残した。

昭和九年、須賀栄子校長の死去に伴い、須賀学園を継承し二代目校長となったが、かたわら県立足工高校長として教育に徹した。

御夫妻を偲ぶ

昭和二十年七月の宇都宮大空襲で学園校舎を全焼したが、六三三制によって旧陸軍兵舎を利用しての須賀学園校長として再建、和裁、男子の調理科を設け、女子ソフトボールで連続全国制覇させるなどクラブ活動を通じて、生徒の自主性、自律の精神を高め、四十二年に現在の短期大学を創設するかわら、私立校審議委員、私立中高連合会長として活躍。この間三十二年から県公安委員会委員、県交響楽団、県読売ブック・クラブ会長など文化振興にも尽力。四十六年十一月三日、勲三等瑞宝章を受けている。須賀さんが世に送った子弟は三万二千人。(読売新聞より転載)

私学の巨星おちる

須賀・宇短大学長死去

須賀友正・宇短大学長が一日亡くなったが、県内の私学関係者は一様に「私学の巨星おちる」と受けとめ、生前の同学長をしのんでいる。

同学長は生っ粋の、宮っ子で、東京高等工業学校(現東京工大)卒業後、県立宇都宮工で教鞭をとった。昭和九年に、叔母で須賀学園創立者の須賀栄子さんの死去に伴い、同学園の校長に。このころ、ともに私学振興に尽力してきた宇都宮学園の上野秀文校長と知り合った。

上野校長は「計報をきき、いまはとても悲しい。須賀さんとの思い出は尽きませんが、終戦後どちらも校舎が焼け落ちたあと、二人で現在の校舎を建てるために、旧陸軍の跡地を払い下げてもらったことなど苦労も様々。教育熱心で人柄は温厚。お酒は日本酒で、めっぽう強い方でしたが、歌謡曲が大好きでゲコの私も同席していた、とても楽しかった」と同学長をしのんだ。

須賀さんは、四十二年には宇短大を創設、学長となったが、この間、県公安委員七期(うち公安委員長六期)、県私学審議会委員を務めるなど重責を果たした。

(毎日新聞より転載)

須賀友正先生

学校こそ私の生きがい

宇都宮でどんな時にも、さん、づけで呼ばれる人が三人いる。二荒さん(神社)、上野さん(百貨店)、そして須賀さんであるという。その須賀さん、須賀学園理事長の須賀友正さんが一日亡くなった。八十歳。私学教育、殊に女子教育に半生をささげた大往生であった。

葬儀委員長の高野耕さんはいう。「親しかった立派な人もたくさんいる。野人の町医者には大役すぎることがハナ夫人と長男淳さんが、政治に無縁だった故人の遺志を尊重してといわれて」。須賀さんのいくつかある肩書の中に、教育以外の公職は、県公害審議委員と、県公安委員の二つしか見つけることができない。名譽はむろんのこと、政治、あるいは政治的といわれるものには、深僻なまでの無色で押し通したといえる。

東京高工(現・東京工大)を卒業し、大正十三年県立宇都宮工業の創設に加わり教諭となる。昭和九年、須賀学園の創設者で叔母の須賀栄子さんが亡くなり、その後を継いで以来の私学教育一筋である。戦後間もないころ、県立足利工高の校長を二年兼務したのは、異色の存在であった。三十三歳で二代目校長となった須賀さんは、教育とともに私学経営という重みが肩にかかった。当時昭和の大恐慌のさなか、数百人の女子生徒に裁縫の職業教育を施すことは、たやすい仕事ではない。須賀さんの高い理想と、誠実な人柄が報われ

どうか学園経営に曙光が見えたころ、戦争である。昭和二十七年七月の空襲で、学園は灰と化した。戦後は学園再建と学制改革に取り組む苦闘の歴史であった。

「一人は一校を代表する」須賀さんが校訓とした名言である。やさしい言葉の中に、ずっしりと重みがある。また、自らは国公立の教育を受けながら、それを優位とする世の風潮に、一矢をむくいる痛烈な皮肉とも受けとれる。高校に家政科と男子の調理科、短大に音楽科があり、女子ソフトボールは全国優勝する。学校こそ私の生きがい、といい、日曜も学校にその姿を見ないことはなかった。一昨年、創立八十周年の須賀さんの喜びの笑顔が、いまもまぶたにある、と高野さんはいう。喜寿の祝いに「家内とともに九十九、百まで生きたい」とあいさつした明治の気骨ある私学教育者、いまはない。きょう学園葬。教峰院正学誼友清居士。合掌(下野新聞)

須賀ハナさん死去

須賀ハナさん(学校法人須賀学園評議員、故須賀友正氏夫人)二日午後十二時五十分、急性肺炎のため、宇都宮市東峰町の渡辺胃腸外科医院で死去、七十六歳。自宅は宇都宮市松が峰二ノ一ノ四。葬儀は五日午前十一時、同市堀田四丁目三ノ七、成高寺で。喪主は長男で須賀学園理事長の淳(あつし)氏。

ハナさんは十八歳で友正氏に嫁いで以来、夫とともに私学の経営に携わり、今日の須賀学園を築きあげてきたもので、五十七年間の人生は学園とともにあり、公職で多忙な友正氏を支え続けてきた私学教育の功労者。九月一日には夫を亡くし、わずか二カ月後に後を追うように亡くなった。

(下野新聞より転載)

須賀友正先生学園葬

(昭和五十七年九月五日)

甲辞

御遺志の継承を誓う

葬儀委員長 高野 耕
須賀学園理事

先生、お別れの言葉を述べさせていただきます。まさかと思っていた事が事実となってしまい、私共の驚きと悲しみはたとえようがありません。

先生は、宇中、東京高等工業学校を卒業され、その後県立宇都宮工業高校に勤務し、教育界に身を投じたのであります。本県における女子教育の先駆者でありました須賀栄子先生亡き後は、須賀学園発展のため日夜を分たぬ御尽力により、現在の宇都宮短期大学の創立と附属高等学校の充実を実現し、須賀学園理事長として縦横の活躍をなされ、一昨年は宇都宮市文化会館において、須賀学園創立八十周年を迎えられ、学生、生徒と共に心からお喜びの御様子は今なお私共の記憶に新たに甦って参ります。また、先生は全国私立中学高等学校連合会理事、栃木県私立中学高等学校連合会長、その他数多くの教育関係の役職を兼ね、私学振興のため、また栃木県文化向上のために尽くされたその偉大な業績は万人の認める所でありま

す。その間、栃木県公安委員、公安委員長として二十四年間の長きに渉り、栃木県の保安維持に献身的努力をなされた偉大な功績は、世

上普く知る所であります。それ等幾多の御功績により藍綬褒章、勲三等瑞宝章を授与され、吾々が祝辞を申し上げたのもつい先頃のよ

うな気がいたします。先生は極めて厳格な御性格であり、御自分の正論はあくまで主張され、誠実な、全く邪心のない貴重な存在であり、現代社会における师表と仰ぐ唯一の方でありました。また反面においては極めて慈悲深く、思いやりがあり、人をひと度信用すれば何時までもそれを続け、その広大な寛容さには吾々一同敬服し、従って人を善導するには独特の手腕をもたれておりました。先生は何時でも私共に「君、うちの校訓はこれだよ」と「一人は一校を代表する」という言葉を示されておりました。先生が如何に生徒のことを思い続け、自己の責任を果たすことの重大さを教え通したかが、これをもってわかります。

本校卒業生諸君が、先生を慈父の如くお慕いし、校訓に従って社会人として活躍し、真面目に自分の職務に従事している姿は、一重に先生の並々な御努力と御薫育の賜と感謝するものであります。また宇都宮西ロータリークラブの創立に当たりましては、世話人として多くの人材を集められ、今日の隆盛を見、さらにインター

アクト結成に当たりましては絶大な御協力を御指導を賜わり、今日の基盤を形成しており、地域社会に貢献し、クラブ発展のため御尽力なされ、名誉会員になっておられます。

数年前運命のいたずらと申しましょうか。あれ程頑健そのもの

は、誠に悲しみの極みであります。

先生の思いがけない御逝去は、暗夜に灯を失ない、頼りとする道標を失った感であり愁嘆このうえもない寂寥感を、どうにも表現することはできません。

まことに、惜別の情に堪えず、ここに心からごめい福をお祈りいたします。

顧りみますると、先生には、大正十二年、東京高等工業学校機械科を卒業し、同十三年栃木県立宇都宮工業学校に教諭として奉職され、昭和九年、同校在職のままご母堂の創設になる宇都宮女子高等職業学校の設置者となられましたが、同年十一月、宇都宮工業学校教諭の職を辞し、宇都宮女子高等職業学校長として私学の教育と経営に専念することとなりました。その後、昭和二十一年、再び公立学校に戻られ、栃木県立足利工業学校長及び栃木県立足利第二工業学校長を歴任された後、再び私学教育界に身を投ぜられ、昭和二十三年、本校の初代校長、須賀栄子先生の後を継がれ、須賀高等女子学校の校長に就任されました。以後昭和二十三年、財団法人須賀学園理事長、同二十六年、学校法人須賀学園理事長、同四十二年、宇都宮短期大学長に就任され、この間五十八年の長きにわたり教育、経営両面にわたり全精力を傾注されてまいりました。

先生は明治三十三年、本校創立以来の建学の精神である「行を通じた人間教育」の実践のなかで、「一人は一校を代表する」を校訓とし、時代の要請に応じた教育を行い、創立当時の女子のみを対象とする学校から、昭和四十二年、宇都宮短期大学音楽科を設置するとともに、附属高校には、普通科、家政科、商業科に加えて、全国でも少ない調理科、音楽科を設置し、一大総合学園にまで発展させ

った先生が、ある夜突如として大出血あり急に入院、手術を受け、その後は経過も極めて良好にて恢復され、八十歳の高齢とは思われぬ御元氣なお姿にて、毎日学校にお出かけになり、いつもあの温顔をもって生徒に接するのが唯一のお楽しみのお姿でありました。しかし本年特有の気候の変化も影響されたのでしょうか。七月末頃から病状が急に悪化し、入院、療養を続け、渡辺伸太郎博士及び御家族皆々様方の手厚い御看護にも拘らず、九月一日、帰らぬ旅路へと旅立たれました。私共は哀しさを通り越した何か空しさを感じております。先生のあの在りし日の温顔が夢幻のように眠に浮かび、胸迫るばかりで言い表すべき言葉もございません。

先生、学園は浮先生の真摯の御努力により益々発展の一途をたどっております。御安心ください。また吾々関係者及び学生生徒一同先生の御意志を継承し、先生が灯された「一人は一校を代表する」という、あの尊い校訓の灯を永遠に栄え、ともしていくよう努力いたしますことを此処に誓うものであります。

先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。

私学振興の功績称う

栃木県知事 船田 謙

謹んで、須賀学園理事長、勲三等故須賀友正先生のみたまにささげます。

先生は、最近もすこぶる御健康の御様子であり、よわいの一日も長からんことを私どもは願っておりましたが、その願ひもむなしく本日、ここに、この告別の儀をもってお別れしなければならぬこと

創立以来、幾多の有為な人材を育てられました。

また、栃木県私立学校審議会長、栃木県産業教育審議会委員、栃木県私立中学高等学校連合会長、日本私立中学高等学校連合会理事或いは日本私立短期大学協合理事として、その公正、的確な判断力をもって、各団体の適正な運営に貢献し、私学教育の振興発展に寄与されました。さらに、先生は栃木県公安委員会委員長等教育関係以外の機関、団体等の役員としても活躍し、本県の政治、社会、文化の発展向上に多大なる貢献をされました。

このように、先生の、本県及び我が国の教育、特に、私学の振興に尽くされた功績は誠に大なるものがあり、これも先生のすぐれた御人格のたまものであると、私どもの常に敬服するところであります。

先生には、今後とも本県の私学教育にますます御尽力、御活躍されることを心から期待していましたが、にわかのご訃報に接し、痛恨このうえもありません。しかし、再び先生の温容にまみえることがなくても「行を通した人間教育」を理想とする建学の精神は、あまねく本学園の役員、教職員をはじめ、長きにわたって訓育された教員たちによって永遠に受けつがれ、本学の隆盛の源となることを信じて疑いません。

須賀先生、どうか安らかな眠りにつかれ、須賀学園の、さらには本県私学教育の発展をお守りください。ここに学園葬が行われるに当たり、謹んで御遺徳をしのび、ごめい福をお祈りして弔辞といた春ます。

偉大な教育者失う

宇都宮市長 増山道保

本日ここに勲三等学校法人須賀学園理事長故須賀友正先生の学園葬がしめやかに執り行われるにあたり、謹んで哀悼の誠を捧げます。

天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客なり、生ある者必ず滅するは世の理とは申せ、このたびの突然の悲報に接し、先生の最近までのお元氣なお姿を思いおこす時、今だに急逝を信じる事ができません。

今、葬送の列に加わりひとしお哀惜痛恨の極みであります。顧みますに、先生が真の教育は私学に有り、創設者である須賀栄子先生の後を継がれ、第二代の須賀学園校長の要職に就かれたのは、昭和九年、まさに新進鋭三十三歳の若さであったとお聞きしております。

以来、資性温厚にして謹直なる先生は誰とでも人間味あふれる態度で接され、生徒はもちろんのこと、先生やPTAの方々からも衆望厚い校長として万人から慕われてまいりました。

先生が、一人は一校を代表する、という校訓を残されたのも、まさに一人一人の人格を尊重されたものであり、人間と人間との心のふれあいというものを大切にされた先生の優しさのあらわれであろうかと存じます。

また、先生は常に和の精神をもって、己にきびしく他人には寛大であられ、ということばを自他ともに、実践されてまいりました。

先生はどちらかと言うと、本来は短気な性格であったように記憶しておりますが、ある時先生のポケットに、おこるな、冷静に、などの自戒訓のメモをかいまみ、まさに先生が人間味あふれる真の教育者であると、ただただ感服をいたしましたことを思い出します。

先生は、豊かな情操をつちかう明るい学園づくりをめざす中で礼法を正す

人のいやがる仕事をやれ

相手の身になって行動せよ

とくりかえし説かれました。また実践においても慰問や清掃などの社会奉仕をとおして、人間として最も大切な優しい心づかいの運動の先頭に立たれました。

本市におきましても、現在毎年三百人余の生徒が本校の門をくぐり、また学窓を巣立たれた多くの皆さんが、実社会において先生のお教えを実践されております。まさに先生の教育理念が、本市を支える大きな柱となっていると言っても過言ではありません。

私も昭和四十六年から本校の理事として、先生と共に本校運営に参画させていただいてまいりましたが、先生との折にふれてのご交宜の中でのご教訓が市長としての今日の私を形成する大きな礎となつておりますことに、衷心より敬意を表するものであります。また先生は、教育をはなれた御家庭にありましては家族との団らんの中で自らマンドリンをかなで、歌われるなどのモダンな才能を持つかわら、民謡などにも精通され、特に先生の、木遣り、は天下第一品で、今でも目を閉じると先生の自慢のこぶしが耳の奥から響きわたってまいります。

このような中で、ご交宜をいただいた思い出が、今走馬灯のごとく私の脳裏を駆けめぐっております。近年も先生は理事長としてひたすら学園の発展に想いをめぐらすなど、私共は先生の今後のご活躍に大いに期待をしていたところでございます。

しかし、はからずもこのたび病魔の冒すところとなり、不帰の客となられましたことは痛恨の極みであります。幸い戦前戦後の激動の時期を、ひたすら学園建設と学制改革という大事業に真向かい敢然と立ちむかわれた先生のご遺志は、現校長の淳先生をはじめ、私達の胸の中で今立派に息づいております。

どうか心おきなく黄泉路の旅をお過ごしください。

先生、長い間ほんとうにご苦勞様でございました。ここに先生のありし日の面影をしのび、ひたすらご冥福をおいのりいたしましたお別れの言葉といたします。



喪の花 小林ミユキ先生

立派な後継者に期待

栃木県私学連合会長 上野 秀文

須賀友正先生、御冥福を祈ります。共に私学人として、戦前・戦中・戦後の教育を歩み続けてきた中に、多くの思い出を持っており、特に戦後のあの荒廃した社会状態の中において教育の建て直し、学校の再建、この容易ならざる問題に直面して日夜をわがたず努力、苦心をされた先生の情熱を今さらながら振りかえらして頂きます。特に先生の学校は戦災によって全焼されました。焼けあとに竹む生徒たちの姿をみた時の先生の心の内はどうであったかと推察に余りあるものがあると思います。縁を求めて借り住まいを定め、授業に入った当座、本当に大変だったと思います。この地に本拠を定めることが出来た時には、どんなにか安心をされ、ホッとされたのではないかと思います。また、この地に本拠を定めてからのご苦心、ご苦労、これを考えると本当に並大抵のものではなかったと推察いたします。

今や短期大学を含めて、一大学園が形成されております。この間における先生の功績は誠に多大であり言葉を知らない程であります。この偉大な功績と広く私学に尽力されました功績も誠に多大であります。立派な後継者を得て本大学園が増々発展を期待されております。

焼けあとに立つて先生が、「ああ、教室がほしい。」と、その精神が、この一大学園の形成、そして立派な後継者によってのこれからの大きな発展と飛躍を期待致します時に、まさに功なり名をとげ

た大往生というべきでありましょう。重ねて先生の冥福をお祈りすると合わせて、思い出の一端を申し述べ、お別れのことばと致します。

米寿、白寿までと願いに

学生・生徒代表 鈴木裕子

きびしい残暑の中にもすでに秋の気配が感じられて参りましたのに、学長先生は、私達学生、生徒にとりまして、あまりにも忽然とお亡くなりになってしまいました。まことに哀悼に堪えません。先生が慈父のような温かいまなざしで、学長室の窓から校庭の私達を見ておられたお姿、静かに学内を歩まれ、時折、私達に言葉を掛けてくださるお姿など、もう二度と目にすることができないのです。それを思うと私達は限りない悲しみに胸塞がれる思いでございます。

先生は昭和四十二年四月、縁に包まれた静かな環境の中に、私達の学び舎、宇都宮短期大学を創設され、初代の学長となられ、爾来今日に至るまで十六年間、ひたすら私達学生の薫陶に当たって来られました。

私達の短期大学は八十有余年の伝統を持つ附属高校の上に設けられ、充実した施設、そして優れた教授陣、マンモス大学には見られない肌理細かな質の高い専門教育によって、全国的に高い評価を博しております。また私達は、高校、短大を通して「一人は一校を代表する」「行学一如」の生活訓を掲げて、芸術と学問の真理を求め、自らの尊厳と責任の重さを学び、人間性を高め、いくことは、

私達の大きな誇りであり、喜びでありました。

昭和五十五年十一月、本大学園創立八十周年記念式典に際して、学長先生はご挨拶の中で、本大学園が創立八十周年を迎えることに期を合わせて、理事長先生も層の上の年齢で数えて八十歳になられ、これをひとつの節目として、さらに大きな未来に向かって力強く前進していきたいとの力強いお言葉を戴いたこと、それに対して、私達短大学生と高校生徒合唱団が祝歌、「ああ喜びのこの館よ」と「宇都宮短期大学讃歌」とを、堂々と高らかに歌ったことは、参列した学生、生徒にとって忘れられない思い出となっております。

学長先生は、昭和五十二年末に、大病を患い、それを見事に克服されたとお聞きしていましたので、今度のご病氣もまた病魔を征服されて、私達の卒業式にはいつもの温かい式辞を当然戴けるものと、思い込んでおりましたのに、この度の御逝去、まことに痛恨の極みでございます。

また、学長先生が朝に夕にその進行ぶりを眺めては喜んでおられた、附属高校の本館増築工事も着々と進み、近く予定通り落成の運びになりますのに、それを見ることもできず、さぞ心残りのことであつたらうと、悔やまれてなりません。

学長先生がかねがねお話になっておられましたように、せめて八十八の米寿まで、できれば更に白寿までもお元気で、本大学園に学ぶ学生、生徒をお導きなされることを願っておりましたが、まことに残念なことでございます。

翻って思いますのに、別離はこの世の習いとか。これからも私達は、学長先生の数々のお教えを心に刻み、豊かな心情を持った人間として、成長するよう、充実した学園生活を送りたいと、かたく心

に決めております。

学長先生、どうか先生のみ霊が、とこしえに安らかでありますよう、お祈りして弔辞いたします。

忘れられぬ先生の愛情

宇都大附属高校 同窓会長 篠崎 キミエ

本日ここに須賀友正先生の告別式にあたり、同窓生を代表いたしまして、哀悼の意を捧げさせていただきます。

先生は昭和九年に須賀学園創立者米子先生の後を継がれ、若くして第二代の校長先生となられ、以来は五十年の長きにわたり、幾多の学園生徒を導かれ、着々と学園発展の実を上げられました。

私達が本学園に学んだのは、平和の世の中に風雲急を告げ、満州事変に次いで第二次大戦が勃発し、生徒はペンを捨てて学徒動員、勤労動員として工場に、そして農村へと出動した時代でした。

そして戦争が激しくなり、ついに戦禍によって河原町の校舎は全焼してしまいました。心血を注いで築いてこられた学び舎が一夜にして灰燼と帰ってしまった先生の心中、いかばかりでありましたか。やがて終戦となり学ぶに、青空教育、他校の校舎を借りての授業を余儀なくされ、そしてようやく現在の校舎に落ち着いたわけでございます。学園と運命を共にされた先生の人生の中で、恐らく最も苦難の時期ではなかったかと拝察されます。以来躍進した躍進、宇都宮短期大学を高等学校に併設するに至りました。これ偏に先生の御人徳の賜と私達卒業生一同喜びを共にして居りました。この学園発展の途にあって、先生は不幸病魔に襲われ、ご世界遊ばさ

れましたことは、誠に哀切、痛恨の極みでございます。先生は、歎しさの中にも常に優しい心の持主でございました。成績の優れた生徒は存分に能力を伸ばしていただけるようにと特待生制度を設け、数多くの特待生を卒業させておられます。

私の父は支那事変で戦死いたし、本学園が女学校時代の四年に在学の時、靖国神社へ合祀されることになりました。私は小学校六か年皆勤で通しておりましたので、女学校でも是非四か年皆勤賞をと願って頑張っていたので、父の合祀祭のための東京行きをふみきれずにおりましたところ、先生は「お父さんに安らかに眠っていたために、お母さんと一緒に行って来なさい。」と、五日間の出校扱いの休暇を下さいました。お陰で、学校生活十年間皆勤で通したことになります。先生の生徒一人一人の温かい愛情、思いやりの深さについては言葉では表すことは出来ません。そのような先生を何時も慈父のようにお慕いしてきたのです。

教えられた校訓「一人は一校を代表する」あとに続く者はこの教えを肝に銘じて精進すること存じます。そして幾多の卒業生は、それぞれの分野において思う存分活躍しております。先生の残された御偉業は必ずや、御子息淳先生が引き継がれ、学園も益々の発展を遂げていくこと存じます。

先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。

遺族代表挨拶

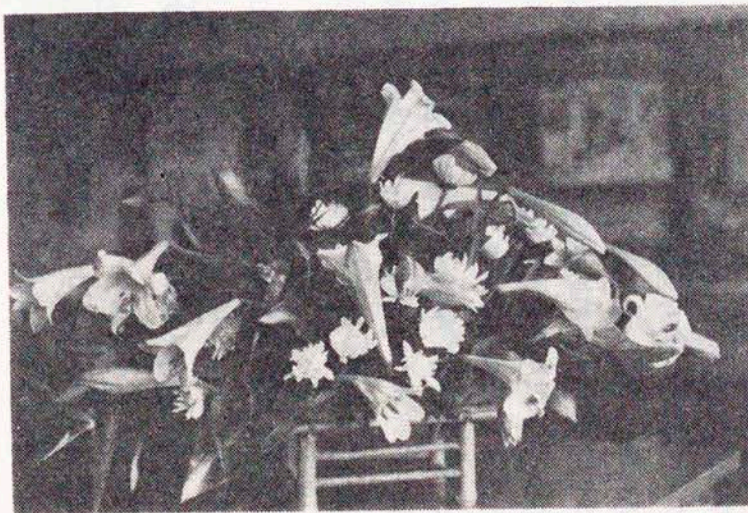
末長くご指導ご鞭撻を

須賀 淳

本日、父のこの学園葬にあたりましては、本当に沢山の方々が日曜日にかかりませず御会葬頂きまして、私共々遺族としてこの上ない感激でございます。また只今は知事さん、市長さんはじめ、多数の方々から過分のお言葉を頂きまして、父が八十年の生涯を教育一筋に尽くしてこられましたのも、今日おみえの皆様方の温かいご指導とご支援のおかげだと私共はそんな風に思っております。

父は本当に教育一筋でございました。真に「学校が我が生きがい」というようなこととございました。毎日、朝早く家を出まして学校に参ります。日曜日も出勤を致します。先生方にはご迷惑な面もあったのではないかと思いますけれども、日曜日は前は自転車でございます。また、自転車ではちよっと無理な輪になって来まして、やっと乗用車を買うことができました。しかし日曜日は運転手は休ませなければいけない。日曜日は、私が運転手になって、父を送りむかえました。

私達、あとに残った遺族は父の名をはずかしめないように精一杯努力する覚悟でございます。どうぞ皆様、末長く、ご指導、ご鞭撻を賜りますように言葉足らずではございますが、お礼の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございます。



枕花 小林ミユキ先生

校内放送

清廉なお人柄を偲ぶ

須賀友正先生逝去のお知らせ

教頭 齋藤 太嘉男

今日は皆さんに悲しいお知らせをしなければなりません。本学園の理事長友正先生が、昨日午後四時四十五分、市内渡辺胃腸外科病院で急性肺炎のため八十歳でおなくなりになりました。理事長先生は皆さんもよく知っているように現校長先生のお父様に当たられる方です。いわば皆さんにとってはおじいさまに当たる方です。

先生は昭和九年創立者栄子先生のあとをついで二代目の校長先生になられ、現校長先生にそのあとを譲られるまで四十年間、第二代会長先生として、学校発展のためにつくされた功績は、言葉では言いあらわせない程大きいものがあります。

友正先生は、明治三十四年創立者栄子先生のお兄さんの次男、栄子先生からは甥ごさんとして宇都宮にお生まれになりました。生涯独身であられた創立者栄子先生は、その後継者として最もふさわしいご自分の甥に当たられる友正先生をえらんだのです。

友正先生は宇都宮中学校（今の宇高です）から優秀な成績で東京高等工業学校（今の東京工大です）にすすまれ、大正十三年卒業と同時に宇都宮工業（今の宇工高です）の先生として長い教員生活の第一歩を歩き出されたのです。工業の先生をやりながら一方では、

須賀学園のお仕事も続け、栄子先生を助けて学校経営に当たるとい
う大変いそがしい毎日を送っておられました。昭和九年十月十四日
栄子先生の急逝に伴い直ちに二代目校長として本校経営一筋に打ち
込まれることになりました。

先生は、その時三十三歳、やる気充分の青年校長でありました。
しかし当時は日本全体が不景気の時で、学校経営に当たられた先生
のご苦労は大変なものだったと聞いております。

当時のお話を聞かされる度に、今の私達の苦勞などは苦勞なんて
ものではないなあと考えさせられることがままありました。

そして先生の永年の念願であった講堂も出来上がってやっとその
苦勞の甲斐があったと喜んだのもつかの間、昭和二十年七月あの宇
都宮の大空襲のため全校舎丸焼けの悲運に逢ってしまったのです。

その夜、防空ごうの中で水をかけながら必死に守られた学簿簿
は、今もって貴重な資料として残っていることは皆さんもよく知っ
ていることでしょう。そして終戦一しかりこれからは先生の二度目
の戦いの始まりでした。

戦後のあれだいたい混乱の時に、乏しい物資の中から学校再建の
困難なお仕事に心血をそそぎ、更に学制改革という教育界始まって
以来の難事業をつきつきと解決して行ったのです。

「一人は一校を代表する」この生活目標は常に先生が口にされ私
達を励ますお言葉でした。全校生徒、職員はそのお言葉のとおり、
一丸となってその厳しい混乱の時期を乗り越えて行ったのです。

この間友正先生は、栃木県私立学校審議会委員、栃木県私立中
高等学校連合会長、栃木県公安委員長等の数々の要職をつとめられ
県教育界にも大きな足跡を残されたのであります。とくに栃木県公

私の中の理事長先生

戸室 文子

原稿を依頼されてから、数回ペンをとったが、どうしても感情が
さきに立ち、涙が流れ理事長先生の昇天が現実であることへの悲し
みとなってしまふ。時間を稼ぎ心の平静になるのをまつに苦勞し
たものである。

私は母を小学校のとき、父を専門学校のときそれぞれなくし、悲
しみは格別であったが、両親とは別の意味で、大きな悲嘆であり、
私の心の支えが、音もなく消え去るような、空虚さをかくすことが
出来なかった。

理事長先生との出会いは、私が小学校を卒業し、本校に入学し、
四年間の寄宿生活をし、沢山の思い出があり、その後上京、専門学
校に学び、空襲下であったが、恙く卒業し、後、教壇に立った。本
校に奉職できたことが、理事長先生のお蔭と深く感謝している。寄
宿舎で得た体験を生かして、寮監となり学校と両立した生活がつづ
いた。その後家庭に入ったが、学生時代と奉職後と合わせて、三十
五年位になると思う。学校は私の人生のすべてであるように思え
る。

数限りない思い出の中で、寄宿生活は私の一生で最高の花園だっ
た様に思われる。その一つは、先生と生徒の親睦会であり、レクリ
エーションや茶話会などが催され、理事長先生を始めハナ子先生、
舎監のキノエ先生と一緒に寄宿生一同二十名、東武電車で栃木の太

安委員というのは警察の総元締ともいふべき要職で、高い人格と清
廉な人柄でないといつとまらない厳しいお仕事です。この公安委員を
二十一年間も続けられ、その間に六回公安委員長の要職につかれた
ことから、友正先生の高い人柄が偲ばれるというものです。
さればこそ、昭和三十七年五月十日藍綬褒章を、さらに四十六年
十一月三日には勲三等瑞宝章をと、つきつきに大きな榮譽を手にし
られたわけでありました。

その先生のお姿ももう見ることが出来なくなりました。
七十歳の古稀のお祝いの席で、「お前日まで、わしゃ九十九ま
で、ともに百歳まで生きよう」と元気で挨拶された先生のお姿が忘
れられません。あのニコニコと温かく見守ってくださった先生のお
顔を二度と拝することは出来なくなりました。まことに残念
です。

先生のご葬儀は九月五日、学園葬として本校でとり行う予定で
すが、くわしいことはまたあとからお知らせいたします。

ではこれから、先生のご冥福をお祈りして一分間の黙悼を捧げた
と思います。

(この原稿は九月二日朝、須賀友正先生ご逝去のお知らせを全校
放送したものである)

平山 唐沢神社へと、当時は大変めずらしいハイキングに出かけ
た。大平山の紅葉、唐沢山のきのこ狩り、いもの羊羹などを買い求
め、または手づくりの弁当をはおばったことも懐かしい思い出あ
る。理事長先生も若々しく、三十七歳位かと思われるが、当時珍
しいカメラを持っていかれ、写真をとっていた。また大切に
保管してあり、当時を思い出すすがとされている。また先生に物理
を教えていただいたが、当時自家用車などないが、流行の車は流線
型といわれ、その図を一筆ですばやく、それがきちんとかかれ、対
流の説明を聞いたことが鮮明にのこっている。お話の上手な先生は
生徒のこころをとらえ、わかりやすく説明されるのでとてもたのし
い授業であった。

寄宿生の住んでいるところと、校長宅は廊下づたいにつながって
いるので、寄宿生はたえず神経をつかっていたものだ。先生は特徴のあ
る威勢のよい歩き方なのですぐわかり、たまたみの部屋なので足をあ
ばしていても、誰かのあいずで足がいち早く引込まれたものである。
規則正しい生活習慣は先代の栄子先生の教えをうけた舎監の先
生の指導で、食事での礼儀、スリッパのぬぎ方、布団のしき方、風
呂のおけのあとしまつ、すべてにわたりにつけられた。学期の始め
と終わりは、理事長先生を交えての親睦会を開催、各自のかくし芸
のあとは必ずといってよい位、お得意の「埴生の宿」を原語で歌わ
れ、先生の低音で音量のある歌唱で、目をとじ口をへへの字にして真
剣に、ていねいに歌われた姿が心にやきついていく。またハナ先生
は三味線が上手で、理事長先生はピアノが得意。仲よく合奏してい
たことも思い出される。遠路地より寄宿舎にきている子供達のため
に、忙しい中を精一杯の親代わりをして下さったことを今しみじみ

感謝している。病気のときも親身になっての看護もしばしばであった。私もひどい病気になり、ひまし油をのまされ、いやがらず一息で、んで大変はめられたこともあり、子供心にうれしく思ったものだ。

温かい人間関係の基礎を、また生きていく上の常識を一つ一つ見本を示して下さった様に思う。

私は温かい愛情のあった寄宿舎をはなれ、上京。また卒業時には空襲下であったため、くり上げ卒業となり、教員の資格をとって帰郷した。母校は全焼し当時の様子を旧職員の先生よりきかされ、理事長先生も大変苦労されたようだ。

校舎をかりての授業、自転車での学校へと先生がとびまわったとか、卒業証書も、紙もなく、印はさつまいもで作った印だったとか、いつもこの話をされるときは声がつまんだ先生。胸中を察するに余りあるものがあった。

奉職しての思い出は数多くあるが、昭和三十五年と思うが、家庭科技術検定で、全国評価講習会が開催された。本校に二級検定の作品を製作するように指示され、大裁ち女もの単衣長着を製作、本校独自の和裁の教科書があり、それに基づいての指導であった。しかし文部省指定の教科書でなければ、減点されてしまう。

検定を推進するためには教科書をかえなければならぬ。本校独自に研究された、紫地にすみのれの花のついた表紙の教科書は永久につかわれなくなった。本校の家庭科は検定を盛んにすることによって、生徒達にも自信をもたせ、他校よりもすぐれていることを世評にしたい、と思ひ理事長先生の理解をいただき、漸く受験者も増加して来た。二級だけは他校で実施することになって、一回

ことであった。

被服室のある二階の窓より、本館西棟建設の様子をながめながらの横顔が、白くやせ服もゆるくなったようであった。学校のさいごの日も、決して苦しそうな様子をみせず、背すじをのばして静かに歩かれた様子が、今も目にのこっている。

先生のことされた「一人は一校を代表する」という言葉も生徒の一人一人がそれぞれに本校の生徒としての価値を知って、その価値を自分で見捨ててはいけぬ。という意味だそうで、先代校長先生ののことされた、個性・能力をのばす教育を引きつがれ、一万八千の卒業生の心に思っている。そして私の心の中に先生の教えの数々が生きています。

私の人生の大半は本校での生活であったことを考える時、改めて理事長先生、ハナ子先生に感謝を申したいと思う。本当に有難うございました。安らかにお休みください。

目の二級は宇女高で実施ということになった。表技テストが、宇女高生と本校生合同で実施することになった。日程が第二学期の終業式とかち合い当惑した。私の出張と生徒達の検定参加の許可を得るべく校長室に参上した。当然大爆発。頭から足先まで、ビーンと響くような大声である。「終業式と検定とどちらが大切か」先生の心には初めての他校での表技テストを案じてのことだったに違いない。暫くの間無言でたっていた私は、意外な声を耳にした。「しっかりやってきなさい」真つ青な顔が笑顔となって私を見ていたのである。筋の通った曲った事の嫌いな先生。でも建設的なことをよく理解して下さる温かい心をもっておられるのである。どんなに叱られても、そのあと素直に反省させられるのは、先生の人間性であろう。結果はすばらしい成績。指導した私もすっかり自信を得たことは言うまでもない。

先生のあの時の許可がなければ、自信をもつこともなくおわたったかもしれない。

先生はいつも自転車通勤されており、本心に質素な生活であった。当時五十七歳ごろかと思うが、学校近くの十字路でよろめいて倒れた、そばにいた私はいそいで手伝おうとし、「先生大丈夫ですか」と声をかけると笑いながら、「そちらこそ気をつけなさい」と、倒れた自転車をおこしながら、笑顔で答えてくれた。温かい、人を思いやる気持ちが見受けられ、社会的にも地位のある先生の日々の勢がそこにあった。

昭和五十三年に大手術をされてから、すっかり弱られ、「学校がすべて」「学校が生甲斐」といわれた先生も、学校にいる時間も少なくなり、静かで元気がない声になってきたことは本当にさびしい

須賀学園葬次第

- 一、一同着席
- 一、導師入場
- 一、礼
- 一、開式の辞
- 一、校歌
- 一、読経
- 一、葬儀委員長弔辞
- 一、弔辞・弔電
- 一、焼香（委員長、遺族、法人役員代表、学生生徒代表、各界代表）
- 一、回向
- 一、讃歌
- 一、遺族代表挨拶
- 一、僧衆退場
- 一、焼香（会葬者一同）

須賀ハナ子先生葬儀

弔辞 理想的な良妻賢母

宇都宮市長 増山道保

本日はここに学校法人須賀学園評議員、故須賀ハナ子刀自の告別式がしめやかに執り行われるにあたり謹んで哀悼の誠を捧げます。私達が驚とする須賀友正先生を失ない悲しみにうちひしがれたあの日から、また、いくばくもたない今、刀自ご他界の悲報に接することはまさに、断腸の思いでありご遺族の胸中をお察し申し上げる時、ただただ世の無情なるをなげかざるを得ません。

願みますと刀自は明治三十九年渡辺久志、キノエご夫妻の長女としてこの世に生を受け、以来ご両親の愛情を一身にうけ、女性らしい中にも教養を兼ね備える才女として立派に成長されてまいりました。刀自は大正十三年十八歳の若さで須賀友正先生に嫁がれるや、須賀学園創立者である須賀栄子先生と学園内に起居を共にし、厳しい中にも優しい人間味あふれた薫陶を培い育ててられました。栄子先生亡きあとは栄子先生との魂の触れあいを通して得た基本精神にもとづき、夫君友正先生を助けて自らも生徒たちの礼法の指導にあたり、しつけの厳しい学校との評価を一段と高め、多くの父兄方の信望を得て須賀学園の名を広く知らしめたのであります。また刀自は「永遠に若くあれ」をモットーとし、若い先生方の面見もよ

(昭和五十七年十一月五日於成高寺)

く、誰からも敬われ親しまれる典型的な女性教育者でもありません。それは誰からも愛され、信頼される人になろうという須賀学園の生活指導の精神を自ら身をもって示したお人柄と言うべきでありましょう。また、刀自は家庭にあっても友正先生のよき伴侶として、また母親としても、二人のお子様方をこれまた立派に育てあげる、まさに理想的な良妻賢母でありました。

私も理事として学園に参画させていただく中であって幾度となく刀自のご教訓を賜ったところであります。先日母と共にお見舞に上った折のこと品位のあるしかも教育者としての威厳に満ちた口調で昔話をされたり、ご家族や学園のことを話されていたのを、側でじっと聞かせていただきましたが、まさに半世紀を私学教育と須賀家のために尽くされた年輪をあらためてかいままた思いで家に帰って母としみじみ語り合ったものでした。いままた思いで家に帰って母としみじみ語り合いたかった。出が泉のごとく湧きあがってまいります。刀自には、友正先生の分も長生きしていただき、学園を私達を見守っていただきたいたいと心から願っておりましたが、はからずもこのたび病魔の冒すところとなり、ご家族の手厚い看護の甲斐もなく、不帰の客となられました。誠は痛恨の極みであります。

今、さん然と睡いております。どうかやすらかに黄泉路の旅をお過ごしください。

ここに刀自の面影をしのび、ひたすらご冥福をお祈り申し上げてお別れのことばといたします。

学園支えた内助の功

宇短大附属高校同窓会長 篠崎 キミエ

つつしんで今は亡き先生の御霊前にお別れのことばをのべてさせていただきます。

九月一日、前理事長先生の急死に驚き涙したばかりで、今またハナ子先生とお別れとは、余りの悲しみ続きで涙の乾く間もありません。

明治、大正、昭和と三代にわたり、創立八十周年も盛大に祝って、益々発展の一途をたどっている本校の歴史の中に、大きく残された数々の成果は、創立者栄子先生のお力はもとより、友正先生を支えてこられたハナ子先生の喜びも苦しみも共にとの、内助の賜であると信じて居ります。

ハナ子先生の発起によりグラウンドホテルで行われた友正先生の古稀の祝も本当に和やかなものでした。そして叙勲祝賀の時に友正先生が：

勲三等祝ひの宴華やける

この喜びを妻と頌たむ

と詠み、ハナ子先生が：

祝はるる夫の叙勲の式宴

心にあがきひとり臥床に

と詠んでおります。このお二人であってこそ創立七十周年八十周年と、今日の繁栄を得ることが出来たのだと思います。

ハナ子先生は常に折目正しい性格で、掃除、食事の後仕末、服装容儀に至るまで色々と御指導下さいました。きびしい反面また優しい方でした。学校では畳の部屋で作法実習を担当して居りました先生は、何時も紺の袴、紺のへちま襟の上っばりを着て真っ白い足袋をはき、内またに歩く楚々とした中に、びりっとした先生のお姿が今でも思い出されて参ります。畳のへりをふんではいけない、お茶の入れ方、膳の運び方等一つ一つ徹底的に御指導下さいました。私達は学校卒業後も日常生活の中に折にふれ思い出しては活用して参りました。学校においても女子の先生の礼儀作法については指導にあられたと聞いて居ります。また先生が年をとられ身体が弱くなつてから、数名の先生を自宅に呼んで、作法について伝承したい気持ちでお教え下さったとも聞いて居ります。ハナ子先生の総べての努力は本校の隆盛の源となることを信じて居ります。

先生の御遺徳は私達卒業生に受けつがれ高く評価されて居ります。「一人は一校を代表する」との校訓を守り、同窓生一同も本校の発展を心から祈って居ります。

新理事長先生も御遺志をつがれ立派に学校の運営に懸命に頑張つて居ります。ハナ子先生も生前と同様に、友正先生と御二人で仲良く、学校の更に発展されますよう見守ってください。

同窓生一同を代表し、安らかに御昇天あらんことをお祈り申し上げお別れのことばといたします。

私達をお守りください

教頭 斎藤 太嘉男

友正先生にお別れしてからまだ二か月、その悲しみもいえぬ今日、ふたたびハナ子先生にお別れしなければならぬとは、人の世のはかなさをつくづくと感じさせられます。

思えば三十五年前、私が本校に奉職した昭和二十二年は、終戦後まもない、まだまだ戦争のつめ跡が各所に残っている頃でありました。昭和二十年七月の宇都宮空襲で全校舎を失った本校は、やっと現在の所に移り再建の途を歩きはじめたばかりの頃でありました。かけて加えて、学制改革による学園存亡の重大時期でもあったのであります。友正校長先生は、その苦しい中を、東奔西走、学校経営に当たられ、ご苦労の毎日だったのであります。

ハナ子先生は常におそばにあって、かげになり、ひなたになって校長先生を助けておられました。当時は男子の職員の数も少なく、職員の三分の二は女子の先生方でありました。その先生方をテキパキと指示し、生徒の指導にあたっておられたハナ子先生のお姿は、若輩の私共にはおそれ多く、加えて校長先生の奥様ともあれば近寄り難い存在として映ったのも無理からぬことと思います。先生は家庭科の被服と礼法の授業を担当して居られました。「礼にはじまり、礼に終わる。女の子は正しい礼儀作法を身につければダメですよ。」と常に正しい礼法を身につけさせるために心をくだいて居られたのであります。

本校のきびしいしつけの指導は、創立者須賀栄子先生の直接のご

かったとうかがって居ります。友正先生の数々の名譽ある受賞のかけにはこのハナ子先生の内助の功のあったことと思えます。

昭和三十七年蓋殿褒章の榮譽に輝いた晴れの表彰式に、奥様ハナ子先生が病氣のため一緒でできなかった友正先生が、しきりに残念がって居られたのもさぞやと拝察されるのであります。

思えばもうこのから病いの先生方であつたようです。

現校長淳先生を副校長として文部省から呼びもどされた頃のことです。文部省の重要な初等中等教育局の課長としての地位をすてて本校に戻られるについては、淳先生自身にとって大きな覚悟があつたことと思われませんが、その時ハナ子先生がこう言われたことを今でも覚えております。「淳が戻って来たら私は引退しようと思つ、私が出ると淳がやりにくいからネ」とさりげなく言われた先生が印象的でありました。お子様の将来を案ずる母親の気持ちだが、聞いて居た私には痛い程よく判りました。

そのお言葉のとおり、先生は淳先生が副校長になられると同時に学校に姿を見せられることが少なくなりました。

副校長先生の御就任と共に学校は一層隆盛の途を歩き始めました。意欲的に動かれる淳先生を温く見守っておられた先生は、安心されると共に何が気のゆるみがお出になつたのではないでしようか。病い勝ちの日が続いたようにお見受けしました。病状の悪化に伴い入院、退院をくりかえされたようでしたが、先月の末の入院でもいつものようにお元気な姿でお歸りになるものと心まちして居りましたが、とうとう帰らぬ人となられました。悔やんでも悔やみきれぬ思いがいたします。

しかし、永かった闘病生活で御一緒にお出かけになることもでき

指導をうけられたハナ子先生にうけつがれ、今日も愛らぬ本校の生徒の指導の目標となつて居るのであります。先生はこうしきびしい面をお持ちであると共に、反面気さくな面もお持ちの方でありました。私達が困つて居ると必ず相談相手になつて一緒に考えてくださり、どんなことでも気軽に相談にのつてくださるたのもしい一面もお持ちの方でもあつたのです。

友正先生が父親であるならば、ハナ子先生は母親のように私達から慕われて居たのであります。子供がお小遣いがほしいときは母親にまっさきにおねだりするように、ほしい教材教具があるときはまっさきに先生に相談いたしました。内外のお仕事で多忙であつた友正先生の代わりに、気楽にお話しできるハナ子先生の存在は、私達にとってなくてはならぬ大切なものとして、大きな位置をしめていたのであります。先生はそんな雰囲気をお持ちの方でもありました。

こんなこともありました。修学旅行に出張するときお小遣いをいただいたことがありました。私は何かお土産にお好きなものをお聞きしたところ「私は生姜糖が好きだからそれをお願いします。」とさりげなく一番安いものを言つてくださる、そのお言葉に何か母親の愛情を感じたことを忘れません。先生はこんな小さなことまで気をくばり校長先生のお力として立派に補佐の役目を果たし、私達職員から頼もしい存在として信頼されて居たのであります。

そんな先生のお働きを友正先生はやさしく見守っておられたようでありまして、ときどき「どっちが校長だ」などと笑われることもありましたが、常に友正先生あるところハナ子先生のお姿がありました。仲良く外出され、音楽会、映画等をご覧になられることも多

なかつた先生が、今度は亡き友正先生と御一緒に何処へでもお出かけになられることを思えば、何か心がなぐさめられる思いもいたします。

ハナ子先生、やすらかに眠り下さい。そしてますます発展する本校の将来と、私達職員生徒をあたたかくお見守り下さい。

姉を悼む

— 悲しみは潮のごとくに

手塚 武

姉逝きて秋空深くなりにけり

また

灰となる背の濡とさよ照り紅葉

去年（昭和五十七年）の九月一日、父とも、師とも頼んでいた姪兄友正さんが亡くなり、またその前月の八月六日には家内の実兄を失つた悲しみの消えやらぬ中の不幸に、私たち近親者は心身共にさいなまれる思いにうちのめさせられた。その悲しみを、私は「秋立つや二人の兄の野辺送り」の一句に託し、友正兄については、更に「天の星ひとつ増え地に泉湧く」の一句をおくつて、その長逝を悼んだ。

ところが、悲しみは更に相次いでおそいかかり、まわりの親近者からは「姉ちゃん」と呼ばれ、ある意味合ではまた母とも慕われ、「姉ちゃん、がんばつてね、大切な人なんだから！」とみんな

から励まされていた華子姉が、友正兄の後を慕うかのように、翌々月の十一月三日、入院加療中に死亡。かねての願い通り、お父さんを見送ってからの大往生をうけてしまった。

十一月三日、秋の花に埋もれた中での通夜を終え、四日午前だびにふされたが、折からの晩秋初冬のがやかな空の下、火葬場に遺骨を拾う感慨が、一種の感情移入を伴った一句として結晶し、自然に、極く自然に、「灰となる背の温とさよ照り紅葉」となって流れるように生まれ出たものである。

口誦むうちに、思いはその空の碧さ、深さとひびき合って捨て難いものとなったので外一句と共に、追悼句として、この一文の冒頭に掲げることとした。い。

そして、この句とともに胸中を去来するものは、これはまた断片的なものだが、

もっと

もっと

もっと

私の思いは

どこまでも

どこまでも

この悲しみを
のせて流れてゆくのです。

聞いてください。
谷川の水も さつきから
流れがせき止まりました。
この夜半の0時
水もまた あなたのみ靈に
しんかんと
黙祷をささげて
いるのでありましょう。

天然自然の人となって
永遠の時間を生きる人
となられたあなた。

あなたの後々に

雪山が光る

こうこうと 円光を

さらめかせながら。

こう私はうたい、そして讀みたい。あなたはそれに、まさに値するお人なのだから。

「聡明」ということは等も姉のために作られたものではなかったか。言葉を変えていえば、姉は、物事の是非、あるいは善悪をも含めて、一種「勘」のするどく働く人だった。言い換えれば鋭い直観力の持ち主であり、例えば経営、人事、予見等についても、良き判断力と洞察力とを併せ持っていた。その上に実行力も盛で、男性に

忘れぬ焼跡のお二人

— ハナ子先生の思い出の数々

園部 シツエ

「ハナ子先生」 ハナ子先生は理事長先生の奥様、校長先生のお母親でいらっしやいます。今、思い起こせば、三十数年前になりましょうか、私がこの学校に入学することになり、その御挨拶に伺った時です。玄關に出ていらっしやった先生に初めてお会いしたのです。昭和十九年、まさに戦争たけなわの時でした。色が白く鼻すじのとおった、そして髪をひっつめに結って紺のへちまのうすばりに紺のもんべという当時の普段着の出で立ちではありましたが、その中に何かしら気品が感じられる、それは美しい方というのが、私がハナ子先生に抱いた第一印象でした。

そして入学。私は礼法を週一時間教えていただくことになりました。礼法とは日常生活の基本を学習する授業です。障子の開け方、お茶のいれ方、運び方などを教しいなかにもまた優しく丁寧に御指導いただきました。私の級友などはあまりの緊張に手と足を同時に出してしまった人もおりました。今となってはそれも心暖まる思い出話のひとつになっています。

やがて戦争も末期を迎え、本校（現、校長自宅の所）も戦火にまかれ一面焼野原になってしまいました。翌朝、私が学校に駆けつけてみるとまだ煙の立っている焼け落ちた校舎の中に、理事長先生とお二人で呆然と立ちつくしておられました。その時のお姿が今でも私の心にやきついておられます。

も見まはしき「力の人」と言うをはばからない一面があり、友正兄とは、まさに「形影相伴う」ともいうべき間柄ではなかったかと思う。

とくに榮子先生なきあとの占領下の諸事むずかしい時代の荒波を見事乗り切る為には、まことに格好の相談相手だったろう。

話が少し固くなりそうなので、思い出のいくつかを挙げて、第一に姉は初代校長の薫陶を最も深く受け継いだ高弟の一人であり、多年に亘る礼法の教授には定評があった。次は面倒見がよく、とくに若い人たちの考えや意見をよく聞く、気づばりの良き、処置の適切さ等、多くの逸話が残されている。気の強さと同時に人間味の豊かさ、情にもろかった一面等は余り知られていなかったのでは？また芸事も好きで、殊に長浪は非凡の域に達していた。歌舞伎に詳しく、この世界については若いから私のせんせいだったこと。なお、子供達の育ち盛りには、家庭的な音楽一家と言った風趣さえもあつた。そして今年金婚式を迎えた私たち夫婦にとっては忘れ得ないなこうどさんだったことを特記して、あれや、これやの感慨を「人間健康がやっぱ第一」としめ括りたい。姉はまだ庭広いの病室に寝ているとしか思えない毎日を、後継きまり子さん達の温情に支えられ乍ら、送っている私達である。

（元本校教諭）

卒業後、私が御自宅に伺った時、それは初夏の夕暮だったと思います。応接間で理事長先生が静かにピアノを弾き（曲は「植生の宿」だったと記憶しています）ハナ子先生が椅子にもたれて聴き入っていました。そのお二人の仲睦まじさに私はあこがれに似た思いを抱いたものでした。

その後、私は本校の職員として勤める事になりました。ハナ子先生は週二回程学校においでになり、礼法と被服の授業を担当されました。また生徒ばかりでなく、先生方の日常生活も正しく厳しく指導されました。本校の先生方の生活がきちんとしているのもそうしたハナ子先生の御指導が今でもどこかで生きているからだと思えます。私達が仕事上でミスをおかし理事長先生に叱られたりすると、ハナ子先生はきまぐれで優しく諭してくれたものです。常にハナ子先生は理事長先生と職員の間にて和を保っていました。そして職員一人一人に声をかけて下さい、本当に細かい個人的な事にまで気を配って下さいました。

夏休みなど職員同志の旅出でごあいさつに伺いますとそれはそれは喜んでくだされ、必ずお小遣いをいただいたものです。健康を害しここ数年、学校におみえにならなくなってしまいました。私達職員にとって大変淋しい思いでした。

内助の功とは昔からよく申しますがハナ子先生は理事長先生のその片腕として、また時には影となって女性らしい立場から目に見えぬほんとうに細かい所で本校の発展のために力を注いでくれたと思えます。

近年、理事長先生も健康を害されてしまいました。ハナ子先生は理事長先生のお世話を終えられてから自分も死にたいという気持ち

でいらっちゃったようです。私がハナ子先生に最後にお会いしたのは九月でした。長い闘病生活と、理事長先生がお亡くなりになった直後で大変おやつれになっていましたが、それでもやはり気品のあふれるほんとうに美しい方でした。

私のほんのささやかな思い出話のおわりにあたって、お二人の御冥福をお祈り致したいと思えます。



ありし日のハナ子先生

特別
寄稿

須賀友正先生を偲んで

栃木県文化功労者 手塚 武

先生は、昭和九年、須賀学園創立者須賀栄子先生去のあとをうけて、第二代の校長に就任された。時に新進気鋭の三十三歳。当時日本は昭和の大恐慌のあらしに見舞われ、本学園の生徒数もわずかに数百名に激減した。苦節十年、先生の御努力によって明るい曙光が見えはじめたところで戦争となり、ついに昭和二十年七月、米軍の大空襲により本学園の校舎は全焼してしまった。それから戦後の学園再建と学制改革という大事業に先生の渾身の努力が傾注されたのである。

爾来先生は、「一人は一校を代表する」という学園の生活目標のもとに、「明るく楽しい学園づくり」に挺身された。かくして本学園は目ざましい発展をとり、昭和四十二年には高等学校のうえに宇都宮短期大学が設置された。

この間、先生は懇請されて栃木県公安委員に就任され、委員長として七期二十一年にわたり、県民の安全と明るい生活環境を守るために尽力された。

「和」を根本とする先生の人となりは、内外の信望を一身に集められた。内輪の古稀の祝の席では、「この次の祝は八十八の米寿の祝、その次は九十九、あなた百まで、わしゃ九十九まで、家内とふたりで九十九、百になるまで生きたい。」と人間味あふれるあいさつをされた。

先生は「学校こそ私の生甲斐」と教育の途に精励され、日曜日も学校に先生の姿を見ないことはなかった。私たちが教職員一同は本当に百まで生きてほしいと念願していたのである。

須賀友正 両先生に捧ぐ 須賀ハナ子

本学園理事 高野 耕

秋風颯々として巨星墮ち
唯々悲しみだけが尾を引く
然し先生の偉大な功績は
益々光を増し辺りを照す
それは永遠に消えることなく
燦然として世を照らすだろう

私学振興のために敢然として
いばらの道に身を挺し
全精神を傾け切り開き
あらゆる困難に堪え忍び
克服し学園の基礎を作る
今は花咲き薫り漂う
両先生の旅立ちには遠い

幾百万年も還らぬだろう
しかし両先生への思慕の念は
いつまでもいつまでも変わるものではない

花咲き匂う学舎は
良き後継の淳先生を得て
愈々栄え百花繚乱と化し
私学の華として範を垂れ
両先生の意志を継承し
遺徳を偲び称え
いつの世までも栄えに栄える
両先生遠いあの世とやらから
お守り下さい

常に積極的に

—— 新生徒会長に就任して ——



このたび皆様の温かいご支援に

より生徒会会長という大変重要な
仕事をさせて頂いていただくことにな
り、光栄に思っております。

昨年、私は、「議長団」という
仕事を体験させて頂きましたが、
会長から与えられたいろいろな仕
事をただ無我夢中で行ってきました。現在こうして、会長の大役を
務めさせて頂くとは、考えてもみなかったので、初めて「会長」と
いう責任の重さと、それをこなしていかなければならない圧力をひ
しひと感じております。と同時にこれから、生徒会を運営するに
あたって年間の大きな行事の一つとしての生徒総会、そして、学校
祭、さらに校内のいろいろな大会など昨年以上にいかに成功させる
ことができるか……。先を考えれば考えるほど、何か底しれぬ重さ
が全身にのしかかってきます。でも、どんな事に対しても、常に、
積極的に取り組む姿勢だけは忘れず、行動していきたいと、堅く思
っております。

しかし、私だけの力で何が出来るだろうか。そうです。何もでき
ないのです。生徒会とは十一人の役員だけが背負うものではありません。この学校で生活を共にする皆さん、生徒一人一人が、私たち

二年小 池 まゆみ

を支える貴重な存在なのです。そこに、先生方の大きな指導力が加
わることによって、初めて、「全体の和」というものが生まれ「協
力」という言葉が、成り立つのではないのでしょうか。私は先輩の築
いて下さった土台を踏み台とし、本校の伝統に恥じないよう、一生
懸命努力していきたいと思っております。

ところで、私の方針とする「わかりやすい生徒会」とは、どうい
うものか、つまり、皆さんに生徒会の内容を理解して頂き、対立の
ない「和」というものを強調していきたいのです。具体的には、そ
の時、その時の行事に押し流されつつあった評議会を改善し、どん
な小さな事でも、気になることがあれば、その場で話し合い、互い
に反省すべき所を反省し、それによって、相互の親睦を深めてい
うというものです。そして、皆さんの理解のもとに、実行に移し、
意義のある評議会にしていきたいと思っております。

とにかく、昨年以上に少しでも進歩するよう、「一人は一枚を代
表する」生徒の一人として、伝統ある本校の発展のために、そして
私たち、役員を支えて下さる生徒の皆様のために、貢献していき
たいと思っております。

最後に、先生方の御指導のもと、生徒による生徒会を忘れるこ
となく、一致協力をお願いし、未熟ではありますが、頑張りたいと
思います。

鈴木一塚田組 高梨一寺田組
一年生大会(個人)三位
高梨一寺田組 増山一田中組
中部新人大会(個人)三位
宇賀神一坂本組
高梨一寺田組
(部長・小林 方子)

バドミントン部

不安と希望に胸をふくらませ、バドミントン部に入部して三年が、過ぎようとしています。「自分が納得する試合」「根気・忍耐力」を目標に、無我夢中で練習に励んできました。

蒸し風呂のような講堂、足が、思うように動かないままで、打ちこんだフットワーク・すぶり、時には自分に負け、涙を流したこともありました。そんな苦しい時、友と励まし合い、自分自身にむちを打ち、乗り越えてきました。その中には、人間関係のむずかしさ、チームワークの大切さなど数々のことを学びとることが出来、それから三年間で得たものを、土台とし社会に巣立って行きたいと思

っています。
大会成績は、よくありませんでしたが、一つのプレーには自己満足しています。今となっては、つらかった事、苦しかった事も最大の良き思い出になっています。そして今、私はバドミントンをやっていたよかったです誇りを持って言えます。

最後に、二年生・一年生の皆さん、青山先生の御指導のもとに、「根気・忍耐力」で負けないよう、頑張ってください。
今後の活躍を期待しております。
(部長・清水佐知子)

弓道部

弓道部は長田先生・七井先生のもと、部員十五名で成り立っている部活動です。
弓道とは、礼儀作法や、精神統一などを重んじる日本武道の一つになっており、校内では、数少ない男女混合の部活動として頑張っております。

過去の弓道部は、大津に出場する度に、必ず入賞するというほど、県内では名高かったのですが、この一年は、自分達三年の成績があまり振るわず、先輩方が築きあげた伝統を

くずしてしまつたようで、大変申し訳ないと思っております。が、十一月には、二年の女子が、明治神宮で開かれる全国大会出場の切符を手に入れた他、県予選でも、入賞するなど、盛り上がりつつあります。またこれからは、どんどん発展していってほしいと思っております。

このように、自分は部長として、この一年間、何をやってきたのかと、聞かれても、はっきりとは答えられませんが、自分なりに、精一杯頑張ったつもりです。そして、ただ一つはっきり言えることは、この三年間、弓道を続けてきて、本当に良かったと思っております。そしてこの部長としての経験が、将来何かの役に立ち、また、良き思い出として、思い出されることを信じております。

最後になりましたが、長田先生・七井先生には、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。これからも、弓道部のために、よろしくお願いいたします。
今後の弓道部の発展を、深く祈っております。
(部長・和氣 光則)

バトン部

あこがれを胸に抱き、バトン部に入部して三年が過ぎようとしています。この三年間で「やめたい」と思い、顧問であった金田先生の所へ行き、その度におこられ泣いたこともありました。でもあの時、先生が強く言ってくさらなかったら、今こうして三年間続けてこれなかったと思います。今では「やめたい」と思ったことが嘘のようで、三年間やってきてよかったと言う気持ちで一杯です。
発表会や学校祭の前日には、真っ暗になるまで練習しました。そして、人間関係の難し

さ、チームワークの大切さを身に染みて感じました。私達と泣いたり笑ったりしてついで来てくれた部員達、部長として何もしてあげられなくて申し訳なく思っています。顧問である金田先生から阿部先生に変わられて、私達から見ると姉さんみたいにやさしい阿部先生、いつも温かい目で見られてありがたうございました。これからも部員の御指導よろしくお願ひ致します。
最後に金田先生と阿部先生の御指導に深く感謝し、バトン部のより一層の発展と御活躍を期待しています。
後輩達、ガンバレ!
(部長・古沢 良江)

学園ニューストピックス

西棟落成式に臨んで

「一人は一枚を代表する」との生活目標を示すカラフルなデザインの看板がそびえ立つ四階建ての立派な校舎「西棟」が完成した。

そしてこの西棟完成の為、汗を流して下さった工事関係者の皆さんに感謝と、学校側のこれからのより良い発展を祝ひ、工事に携わった会社側と学校職員、生徒代表者とで落成式がしめやかに行われた。

しかし、ただ一つこの祝ひの中で残念に思

ったのはこの西棟完成を前々から期待しておられた友正先生・ハナ子先生御夫妻がこの式に出席出来なかつた事だ。友正先生は学校に來られてはいつも本館から新築工事をごらんになり後の完成を楽しみにしておられたのにとても残念でした。でもあの式には出席出来ませんでした。僕は友正先生がある場におられたような感じがしました。
これから巣立っていく我々三年も在学中にこの西棟を利用して本館に恵まれ高校時代の一つの思い出になることであらう。

学校祭に参加して

恒例の宇部宮短期大学附属高等学校の文化祭が、去る十一月二十七、二十八日の二日間に行なわれて本校において盛大に行なわれました。校舎増築の関係でいつもの年よりも少し学校祭の日が延びましたが、晴天に恵まれ例年になく暖かい二日間でした。

なんとといっても伝統的な調理科の体育館に於いての大食堂、家政科の展示物、生徒会主催のチャリティーバザー、各クラブの展示、外では校門の所で、バトン、プラスチックの

三年 増山 昭

三年 太田 恵子

発表と宇短大附属高等学校の生徒とは思えない程プロ顔負けのすばらしく申し分のない演奏でした。

来年度の学校祭は今年度の文化祭よりもなお更に盛大に行われるよう、後輩の皆様にも頑張ってもらいたいと思います。

(学校祭実行委員長)

本年度校内読書感想文

コンクールの入選者

本年度も、夏休みを利用して、全校生徒参加で読書感想文コンクールが実施され、次のような結果が出ました。

〇三年		〇二年		〇一年	
一位「車輪の下」	10 情野 朋子	一位「帰郷」	9 菊池 由美	一位「ビルマの堅琴」	13 鈴木 宏美
二位「恩讐の彼方に」	10 加藤 悦子	二位「友情」	9 岡田真由美	二位「わたしは負けない」	7 伊東 愛子
三位「ビルマの堅琴」	16 高橋里恵子	三位「アンネの日記」	5 田崎 京子	三位「友情(この世で欠かせない)」	5 高橋 美江
〃 「窓ぎわのトットちゃん」	〃 〃	佳作「刑法入門」	1 山崎 雅代	〃	〃
佳作「やさしい人生哲学」	10 磯野由紀子	〃 「黒い雨」	2 湯本 康子	〃	〃
〃 「車輪の下」	1 斎藤 厚子	〃 「アンネの日記」	3 奈良百合子	〃	〃
〃 「人間失格」	3 大久保ゆかり	〃 「ぼくは希望に向かって走る」	4 何藤 晴美	〃	〃
〃 「親友交歓」	4 熊倉 寿江	〃 「ゲテテ詩集」	5 福田 昌代	〃	〃
〃 「黒い雨」	5 成田由美子	〃 「青葉繁れる」	6 長 正己	〃	〃
〃	6 関口 幸恵	〃 「項羽と劉邦」	7 連藤真佐美	〃	〃
〃	〃	〃 「しっぽんばな」	8 小瀧 健彦	〃	〃
〃	〃	〃 「津軽」	8 加藤 毅	〃	〃
〃	〃	〃 「アンネの日記」	9 縫島 美加	〃	〃
〃	〃	〃 「人間失格」	10 佐川富美江	〃	〃
〃	〃	〃	11 荒川智恵子	〃	〃
〃	〃	〃	12 須田 香美	〃	〃

研修旅行コーナー

インターアクトクラブ

北海道研修旅行に参加して

大崎 雄 昭

インターアクトにとって最も楽しみにしている北海道研修旅行が今年も実施されました。本校のインターアクトの生徒達は年次大会とこの北海道研修旅行が、他校インターアクトとの数少ない交流の場であり、それだけにこの研修に寄せる期待も大きなものがあります。今回も多数の希望者があり、参加出来た生徒達にとってはこの上もない喜びでありました。

今回の研修旅行の中で、特に生徒達が勉強になったのは、やはり現地での交歓会であったようです。ジギスカン料理を前にして、交換留学生や第二五地区のインターアクトとの資料の交換や活動の様子などについて自由な雰囲気の中で活発な意見のやりとりができた。さらに交換留学生との交流なども今までになく活発であったように思います。国際

理解を深める一つのきっかけになったのではないのでしょうか。

特に今回の留学生のマナーのすばらしさは、心を打たれるものがありました。例えば、ギャラリー・ホーランという留学生ですが、混雑した列車の中、私が前に立つとすぐ立ち上がり座席を譲ろうとします。「いいから座って居なさい」と言っても、「どうぞ」と言って席を譲ります。目上の人に対するマナーなど、我々日本人が見習う所があるなど感じました。一緒にいた生徒達も教えられた事と思います。ただ外に向かって奉仕を呼びかけ、形式だけの活動をするより、自己を見つめ、他を思いやる心の鍛練が必要であると感じられました。そんな点を直接生徒に見せてくれた留学生に感謝しています。

またRCの方々はRCの鉄則という「時間を守る」「挨拶をしよう」など身近かに出来る大切なものを改めて教えて頂きました。不断の生活の中で実行させたいものです。

最後にこの旅行に際し、多大の援助を下されたRCの方々、多忙の中引率御指導下された高橋団長さんをはじめ引率RCの方々に深くお礼申し上げます。(教諭)

外人との交流も

二年 平石 昌代



三月二十三日から四日間行われた研修旅行がとうとう終わってしまいました。私にとって北海道旅行なんて生まれて初めての旅行でしたので、行けることに決まった時は、とてもうれしくはしゃいでしまいました。それに、

東北新幹線や飛行機にも初めて乗った気分は最高でした。

私たち第二五地区のみんなとの交流はとても早くなじむことができました。初めは少し抵抗も感じましたが、楽しく北海道へ行くことなど忘れてしまっていました。

この旅行の主体である交歓会では、北海道インターアクターの人達が私たちインターアクターにパーパーフラワーを一輪ずつ手わたしてくれました。私の場合は前の席が、オーストラリアから留学していたリス・ロイという女の子だったので、外人との交流もできてもいい経験になりました。ほんとうにこの北海道旅行に行くことができ、いろいろな経験ができてきました。あの有名な時計台や北大やアイヌの踊りなども見ることができて感激です。でも一番楽しみにしていた時計台が、あっという間に終わってしまっただけで、ちょっと残念でした。でも、あの関東とは違った広々とした景色や道路の広さは今でも目に焼きついていきます。とてもすばらしい旅行でした。ところで、私のインターアクターとしての活躍ができたかどうかはちょっと疑問ですが……。これからは、学校などでの活動を、一生懸命やっていきたいと思いま

大自然の神秘にふれる

二年 増山 綾子

初めて行くあの北海道。はずんだ気持ちでもこの研修旅行に参加しました。そんな中でも見知らぬ人達と四日間一緒に過ごすという不安はありません。が、そんな不安感は一層楽しい旅行になりました。初めて乗る東北新幹線や飛行機は疲れず快適でした。ジンギスカン料理を食べながらの交歓会は、とてもよい雰囲気の中でできたと思えます。

オーストラリアの交換留学生や北海道高校の人とは特に親しくなれ、学校の話やら北海道、オーストラリアの話やらで時間がたつのがはやかったように思いました。

札幌の都会的な街並は全然北海道に居るといふ実感がありませんでした。でもあちこちに映える緑は今でも鮮明に目にうかびます。

緑あふれんばかりの美しい北大キャンパス、噴火のすさまじさをのこす昭和新山、今日に文化を伝える白老、そして一番印象的だ

った洞爺湖の夕陽、口では言いあらわすことのできない大自然の神秘に触れ感動の連続でした。

北海道の広大さに触れると何だか自分の心まで広く大らかになった気分になるから不思議です。味覚では、本場の「みそラーメン」バターたっぷりのじゃがいも、そしてミルクたっぷりのアイスクリームはとてもおいしかったです。

いろいろな地域のインターアクターやロータリアンの方々とふれあうことができ、私にもっと人のため社会のために役に立つよう学ばせてくれたことはこの旅行参加の一番の目的達成であったと思います。今後の生活に役立て一日一日を有意義にしたいと思います。

商業科後援会研修旅行

湯けむりの草津の旅……

第六回商業科後援会役員研修旅行が八月十二日(日)・二十三日(月)の両日にわたって行われた。

二十二日午前八時学校を出発、国道一九号線(日光街道)の杉並木の中を私達を乗せたマイクロスバスは快調に走り、第二イロハ坂

を一気にのぼり最初の見学地日光華厳滝に到着する。水量が豊富で滝は滝壺めがけ力強く落ち、その水飛沫が周囲の緑とよく調和し実に見事であった。春夏秋冬それぞれの季節に眺める滝もそれなりのおもむきがあるが夏の滝は実に雄大で見応えのあるものだった。

滝をあとに、国道二〇号線の金精有料道路をそして名物トモロコシ街道を走る車の窓からはトモロコシの独得のにおいが車内にまで入り空腹の胃をさかんに刺激する。いつの間にか車は沼田に入り三洋ドライブインで昼食をとり、少休した後、吹割の滝を見学する。吹割の滝は滝壺城へ通じるという伝え

られている所で片品渓谷を代表する名瀑で高さ約五メートル、幅約三十メートルあり、花嵐岩の岩盤が深くえぐられ、両側から落ちてくる流れがぶつかりあって豪壮なおもむきを見せている。この渓谷には水食によってできた色々な形の絶壁があり、下を流れる水の清らかさ両岸の自然林とマッチし自然のいびき

が感じられる。

見学の後、国道一四五号線を一路草津へ、草津よいと一度はお出で、の歌で知られる草津温泉。ここは、一九九三年(建久四)

八月に源頼朝が浅間山麓に巻き狩をしたとき

に発見し入浴したといわれ、以後東国の名湯として栄えて来た。私達一行は町の中心地にある最古の湯が湧き出る湯畑(二〇〇数カ所から出る温泉は毎分三六〇〇リットルとその湧出量は日本一)の際に建つホテル一井(安政元年、初代市川善三郎が湯畑に面した一番井戸の地に開業したのに始まる。)に入り、休む間もなく午後六時三〇分から研修会に入り、会長、事務局の挨拶について議事に

移り事務局からの商業科の指導経過報告、進路指導講話等が行われ活発な質疑応答のうち有意義な研修が終わった。

午後七時四〇分から会場を移し、大広間で新鮮な山菜や高原野菜、鮮魚料理等草津ならではの料理に舌つつまみをうちながら談笑、隠し芸等で夜の更けるのも忘れるほどでした。

昨日に続き晴天にめぐまれ、午前八時三〇分ホテルを後にした。朝早くから真夏の太陽が輝き、車は一路国道一四五号線を走り鬼押出しへ。ここは、一七八三年(天明三)旧暦

七月八日の浅間山の爆発によって吹き出された長さ六キロメートル、幅一〜二キロメートルの溶岩の凝固地帯で壮観な眺めである、その一角に浅間園がある。園内には地球の内部や地核の変動、浅間山の生いたち噴火の再現と資料等が展示してある浅間山博物館の屋上には展望台があり一望のもとに浅間高原が見られる。

さらに、日本のポンペイとして知られる鎌原観音堂に車は進む。この一帯は浅間山噴火の熱泥流で埋没し、鎌原村の全戸数一八戸が流出、死者四七七人、生存者は鎌原観音堂に逃げのびた九三人のみだったと伝えられている。九三人の命を守った鎌原観音堂は、本



導が十一面観音坐像で平安時代の建立（八〇六年、仏像安置）といわれている。現在のお堂は一七二三年（正徳三）に建立したものである。心を痛めながら参拝した後、軽井沢高原の冷気を全身に受けながら国道十八号線、五〇号線、東北自動車道を快走し、（途中松井田碓井ドライブインで昼食を取る）予定より一時間おくれの六時三〇分全員無事に帰校し解散した。

参加者

父兄側―吉井定義、渡辺好江、長谷川吉夫、尾島利夫、坂寄孝一、長峰彦太郎、板橋寛、小島巖、溜池春吉、荒川昭男、山本興吉、小泉昭三、荒川輝夫、竹沢一美、久保井三郎、矢古宇欣次、金田悦郎、黒後元、郷間高俊、学校側―伊沢、松本、信夫の諸先生。

（伊沢記）



2-4 山中順子

「全音高協」

全国大会開かる

昭和五十七年度の全国音楽高等学校協議会全国大会が、九月十七、十八の二日にわたって本校を会場として開催された。北は北海道から南は九州、宮崎県まで、文字通り全国から五十校、百十名の先生方が集まり、本校からも校長先生をはじめ、教頭・太田・根本の各先生が参加された。

一日目はソルフエー・ジュ・リトミック・実技レッスンなど、音楽科二・三年生による公開授業が行われ、日頃からみが行っている技を披露。また昼食は、調理科生徒が腕によりをかけて作ったもので、先生方は、立派にできあがった作品にしばし舌鼓を打ち、談笑されていた。また配膳係の生徒のマナーの良さに感心され、誉めておられたのが印象に残っている。

二日目は、短大校舎に場所を移し、研究発表等が行われ、正午には成功裏のうちに解散となった。

本校でこのような全国規模の催しが開かれたということは、私たちにとても大きな誇りとなっている。

「高校生のための文化講演会」本校にて開催

早大の秋永教授
日本語の発音テーマ

豊かな人生の出発点に思索のきっかけを―と、二十八日、宇都宮市の宇都宮短期大学附属高校と県立宇都宮北高校で「高校生のための文化講演会」（サンケイ新聞社主催、文部省、栃木県教育委員会後援、集英社協賛）が開かれた。

早稲田大学の秋永一校教授を講師に招き、この日、午前中は宇都宮短大附属高、午後は宇都宮北高で、「日本語の発音の歴史」をテーマに行われた。

宇都宮短大附属高では、普通科と音楽科の一年から三年生約六百人が講堂に、宇都宮北高では体育館に父兄をまじえた生徒約六百人があふれ、秋永教授は、関東、関西、東北、九州など各地の方言の違いを、カセットテープと日本地図を使って説明。微妙なアクセントや発音によって意味が異なる「日本語」について、五十分間にわたって講演。生徒も真剣な面持

ちで聞き入っていた。

終わって集英社の五味湖第一出版部次長から各校生徒代表に「集英社文庫一〇〇冊セット」が贈られた。

三年かるた会

昭和五十七年度、三年かるた会が、一月二十二日、本校家庭科特別教室において行われました。各クラスより選ばれた五名が集まり、出場者抽選によって六グループを編成し、予選で取り札数の多い者上位五名が各グループから、決勝戦に進出しました。各グループとも奮戦していました。

結果は次の通りです。

- | | |
|----|-----------|
| 一位 | 八組 田口 恵子 |
| 二位 | 六組 内田容理子 |
| 三位 | 十三組 知久小夜美 |
| 四位 | 三組 青木 正枝 |
| 五位 | 八組 小林志津代 |
| 五位 | 七組 北谷 司 |
| 五位 | 十二組 鈴木 久恵 |